

念願果たし



遠征隊員 (敬称)
 ▽ヨット総指揮 山田克巳、高須洪吉(白雲艇長)、水野範彦(フライング艇長)、藤田征男(フジIII艇長)、山崎光春、萬田憲一、榊原司、鈴木紀克、安藤康治、神谷友之
 ▽登はん隊長 池沼慧、常田進、鮎沢清次、小林亘、葛谷靖、森本学
 ▽同行 中日新聞記者 山田伝夫(岡崎支局)



死と隣合わせにいた登はん隊員、海の男も船酔いに苦しめられた。陸にあがったばかりの隊員らに、その胸のうちを聞いた。

隊員の胸のうち

多くの応援に感謝

総指揮をとった山田克巳(四) 南ヨット協会会長(四) 海が荒れると、ヨットは四階から一階に二階までエレベーターで落ちるような感じがし、自分の体がどこにあるか、分からなかった。本当に、たっさんの人に応援してもらえたので成功したと思う。

海、山の男が一体

婦(そつ)婦岩(八丈島南方

四百シのアタック以来十七年ぶりに洋上登はんの念願を果たした登はん隊長の池沼慧(三) 日本で初めて、海の男と山の男が一体になったという形で応援したのも、おそらく全国で初めてと思う。市民の皆様さん、ありがとう。

岩がもろくて大変

登頂への道を通り開いた最後の登はん隊員・小林亘(三) 最後の四十斤からが度、父島に上陸し、地上に足

もう2度とできぬ

登はん隊員の鮎沢清次(三) 前回、五十六年、伊豆諸島の須美寿島の岩登りで、仲間を転落事故で失っており、ひとつ間違つと、死亡

ふろに入りたいよ

手作りで世界一周をしたことのあるヨット「白雲」の艇長高須洪吉(四) 全員、無事に帰れたのも、皆さんのおかげです。今はまず、ふろに入りたい。

まだ体が揺れます

ただ二人の昭和ひとケタ世

代で、「フライング」の艇からはきほどもあるイセエビ長、水野範彦(五) やつがいた。無線免許の取りたてと帰ってこれた。まだ体が揺らかったが、太平洋の何もなれ、会場の皆さんが動いて見とろだったので、一日三回。後は、おながが減った無線の定時連絡が楽しみに。もんで(これくらいにしまなりました)。

当日は9時間通信

「竜宮城」が見えた 無線連絡の中心となった鈴木紀克(四) 登頂当日の十九日は、無線の調子もよくラッキーだった。朝の八時から九時間、無線通信にかかりましたよ。三十斤漕ると、ふっつきり、長い一日だった。

山田 克巳さん



池沼 慧さん



小林 亘さん



鮎沢 清次さん



高須 洪吉さん



水野 範彦さん



藤田 征男さん



鈴木 紀克さん

